

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

TRSEO

2011

春

Vol.78

平成 23 年

地域の歴史

養老山地と揖斐川にはさまれた海津市南濃町

地域の治水・利水施設

津屋川の歴史と治水

歴史記録

濃尾地震と河川災害 第二編

濃尾地震による堤防崩壊などの河川被害

研究資料

瀬古 尹宏

教育現場からの質問





養老山地と揖斐川に

はさまれた海津市南濃町

海津市の揖斐川右岸(旧南濃町)は、古代からの歴史と文化を誇る養老山地山麓の先進地域と、江戸時代以降に開発された輪中地帯によって成りたっています。治水安全度が向上した現在では、商工業が発達し宅地化が進んでいます。

古代より開けた揖斐川右岸

岐阜県の南西部に位置する海津市は、平成一七年(二〇〇五)三月二八日に海津町・平田町・南濃町の三町が合併して誕生しました。海津町・平田町は、長良川と揖斐川に挟まれた高須輪中とよばれる地域です。南濃町は揖斐川右岸にあって、西側に養老山地が連なる南北に細長い地域で、南は三重県桑名市、西は三重県いなべ市、北は岐阜県養老町と接しています。



養老山地側から南濃町平野部を望む

養老山地の麓の丘陵地は、採集狩猟生活であった縄文人にとって、恵まれた環境にあったようで、多くの縄文遺物が出土しています。

庭田東方の丘陵では、マガキを主とした貝殻が散布する庭田貝塚が発見されており、当時はこの辺りまで伊勢湾が入りこんでいたことがわかります。



ます。

この地域では弥生時代の遺跡は見つかっていませんが、続く古墳時代の遺跡が多く存在するので、先住農耕民が存在していたと推測されています。庭田の円満寺古墳は前方後円墳で、三面の舶載鏡をはじめとした玉類・石製品などが多数出土しており、最も古い時代の古墳(前I期古墳)に属するとして注目されました。その存在は、この地域が極めて古い時代から大和朝廷と密接な関係にあったことを示しています。この他一〇〇基以上の古墳があったことが確認されており、その多くは後期古墳に属しています。

九世紀半ばに多芸郡の西部南部を分割して石津郡としたとされ、『和名類聚抄』によると石津郡には、山崎郷・建部郷・大庭郷・桜樹郷の四郷があったと記されています。この内当地に比定されるのは山崎郷で、山崎北谷と山崎南谷の間の扇状地に

位置し、北に上野河戸があり、ここに郡家があったとも考えられています。

当地域には、行基寺をはじめとして



南濃町上野河戸の行基寺

行基(六六八〜七四九)を開祖と伝えられる寺院が多く、中でも庭田の円満寺は、平安中期の作とされる薬師如来坐像や大日如来像(平安中期〜後期)、十一面観音立像(平安後期)などがあり、平安時代中期から、この寺を中心に



南濃町庭田の円満寺

多くの堂宇が存在していたようです。中世の当地域については、郡戸荘と

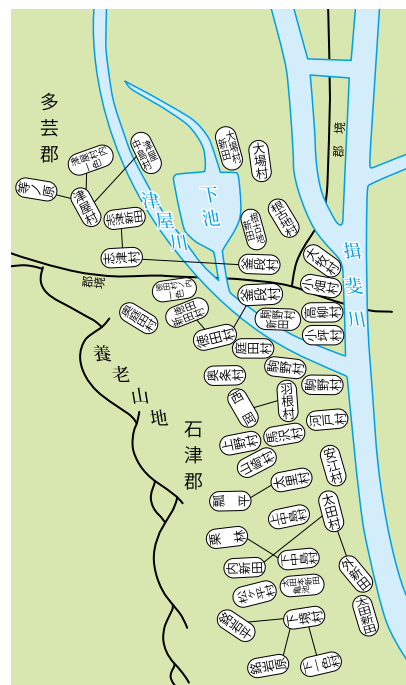


いう摂関家領が海津市全域にわたって成立していたとする説がありますが、確証となる史料は見つかっていません。

しかし、円満寺には鎌倉時代の作となる仏像があり、平安時代から引き続き仏教文化が盛んであり、それを支える経済力があつたことは確かです。

江戸時代の領主変遷

江戸幕府が成立した当初は、高須城主・徳永法印寿昌が多芸郡・不破郡・石津郡・海西郡で五万三千石を拝領し、海津市域のほとんどが高須藩



江戸時代村図

領となりました。寛永五年（一六二八）高須城主徳永昌重が改易され、領地は一旦幕府直轄地となった後、寛永一二年大垣城に入部した戸田氏にその一部が与えられました。当地域では津屋・庭田・志津・徳田・奥条・羽根・馬沢・大里・安江・中嶋・松ヶ平・下一色の村が含まれました。残った上野河戸・山崎・駒野の三村は寛永一七年高須城主となった小笠原貞信の領地となりました。元禄四年（一六九一）貞信は、毎年のように水害に見舞われるこの地方からの移封を願い出て、越前大野郡に移されました。その後には、尾張藩主徳川光友の二男、松平義行が高須城に入り、松平氏は明治維新まで三代にわたって高須藩を治めました。四代藩主義敏は、高須が度々水に浸かるのを嫌い、駒野に領主の居所を移しています。家中屋敷・寺社・町屋などが一緒に移ったので、新城下となった駒野は急速に発展しましたが、六代義裕のとき、高

須に戻っています。

他にも度々小規模な領地替えが行われた結果、当地域は大垣藩領・高須藩領・幕府直轄地などが入り組み、中には下境村や太田新田のように一つの村が分割して領有されるなどの複雑な統治がなされました。

太田輪中の形態と成立

当地域の南部は、「太田輪中」と呼ばれた地域で、東は揖斐川、南・西は現在の山除川に面しています。江戸時代の山除川は揖斐川分派川・香取川に流入していましたが、明治改修で香取川が廃川となった際、その流末を旧香取川の流路を遡って揖斐川に流入するようにしました。もともと

の山除川は、養老山地の東側を流下する谷水や扇状地端の湧水を、堤防で受け止め南に流下させる人工河川でした。輪中の北辺は河川に面しておらず、河川堤防は存在せず、西北



南濃町吉田の山除川

部の扇状地から流れてくる悪水を排除する小さな土手があるだけでした。太田輪中の正確

な成立時期については判明していませんが、輪中の南北に縦断する中堤の西側が先に開発されたようです。

この輪中は、江戸時代の村では太里村・下一色村・松山村・下境村・中嶋村・内新田・亀池新田にあたり、新田村を除く五ヶ村については近世以前に成立していたとされています。ただ、西に山除川堤防を、東に中堤を築いて輪中となったのは、かなり後のようです。わかっている年次として、内新田の開発が正保元年（一六四四）であることから、だいたこの時点で西側の輪中が完成したようです。

揖斐川に堤防を築いて、中堤の東側には太田新田と下境村新田の二ヶ村が開発されました。太田新田は、太田新田差出明細帳に正保四年（一六四七）小笠原土佐守検地と見えるので、この直前に開発されたと思われる。下境村新田も、慶安元年（一六四八）大垣藩によって開発されたと史料にありますから、西側の開発完了から間をおかず東側も開発されたこととなります。

元治元年（一八六四）の「太田新田・下境村水防一件日記」は中堤が切れたために生じた二ヶ村間の争論を記録していますが、このような中堤をめぐる争論は、東西の間でしばしば起こっています。中堤は最初に築い

た西側の村が所有していましたが、東側が開発されると西側にとって必要のない堤防になりました。かえって中堤が壊れると、悪水を東側に排出できるので修復しようとはしません。これに対して東側は西からの悪水を防止するため中堤の修理を訴え、争論が生じました。この利害対立は明治以降も続いたと言われています。

近・現代の海津市南濃町

河川が乱流する低湿地に輪中堤を築き、水害に苦しみながら発達してきた海津市でしたが、近代になると先進国の技術が導入され、明治改修を始めとした近代治水工事を重ねることで、治水安全度が飛躍的に向上し、安定した農業が営まれるようになりました。また、木曽三川を渡る橋梁の建設などの道路網の整備によって、商工業地・市街地も発達してきました。南濃町には養老鉄道養老線（旧近鉄養老線・桑名～養老間は一九一九年開通）が通り、桑名まで約二〇分、名古屋まで乗り継いでも五〇分程度と通勤圏内となっている南部地域は、特にベッドタウン化が進んでいます。

参考文献

- 『南濃町史』昭和五十七年 南濃町
- 『岐阜県の地名』平成元年 平凡社
- 『日本地名大辞典』昭和五十五年 角川書店

地域の 治水・利水 施設

津屋川の歴史と治水

津屋川河道の変遷

津屋川は、養老町地内の養老山地を発し、海津市南濃町の北辺を流れて同町山崎地先で揖斐川に合流する長さ約一三・八kmの一級河川です。清流として知られ透き通った水は多様な生物の貴重な生息地となっています。

養老山地の小倉・津屋・志津・徳田・庭田・羽沢などの谷水や同山地東麓に



南濃町戸田の津屋川

展開する扇状地からの湧水を集めて、多芸輪中の西を南下する津屋川は、左岸に多芸輪中堤が築かれています。右岸は無堤でした。

かつての津屋川の流路について、『岐阜県治水史』には、「往古は多芸郡有尾村・大野新田・鍋鶴・大場新田の地内を経過して下池に灌流していたが、明暦二年三月二十二日今の津屋川流路となった。」と記述されています。下池は多芸輪中南部にあつて、大正時代に干拓される以前は、岐阜県最大の池沼で、遊水池として機能していました。

『岐阜県治水史』巻末の岐阜県洪水年表には「明暦二年三月二十二日津屋川筋河道を変え、…」との記述されていますが、多芸輪中を貫流して下池に注ぐ津屋川が洪水によって現在のような流路になったと誤解されま

流出する谷水や扇状地の湧水は、無数の流れとなってそれぞれ平野部を流れていたもので、平野の開発には山麓近くでこれらの水をまとめて揖斐川に排出する水路が不可欠でした。

人工河川・津屋川の完成によって、津屋川沿いの輪中は一六六〇年頃には成立していたとされています。新河道が、流路が大きく異なる津屋川の河道変更として伝えられているのは、旧津屋川に注いでいた谷川が新津屋川に集まるようになったためかも知れません。

さらに誤解が生じやすい表現として、『木曾三川治水百年のあゆみ』に「津屋川はもともと牧田川の旧流路であつたものが江戸時代の牧田川付替によつて分離されたものであり、明治一二年（一八七九）の洪水以後は現在の川筋を流れるようになったといわれている。」とあり、また、『養老町史』には「牧田川は、もと養老山麓沿いに津屋川筋へと流れていたのが、多芸郡にも領地があつた高須藩

養老山地の谷水を集めて揖斐川に注ぐ津屋川は、左岸が多芸輪中の西・南の輪中堤となっています。現在の津屋川筋は、江戸時代に新田開発のために開削された人工河川で、大雨が降ると輪中堤内に切り入れして大きな被害をもたらしました。

地域の治水・利水施設



養老山地から流出する谷川

主徳永法印によって烏江まで掘鑿されて現在のようになったという。」といった記述が見られます。明暦二年に開削された津屋川は、牧田川とは水源・流路について全く関係性のない河川であつて、津屋川という呼称が曖昧に使われているようです。

江戸時代の水害と治水

津屋川の左岸・多芸輪中に属する江戸時代の村のうち、志津新田・津屋村・徳田新田・釜段新田・駒野新田が現在の海津市南濃町に入っています。

近世初期の土木技術で造られた津屋川は、通常は細い谷水や湧水を集めた程度の流量であつたので問題な



南濃町太田の円成寺薩摩義士之墓

く流下しましたが、大雨が降ると、谷川の水は急激に増加し流下が阻害されました。

さらに

揖斐川の水位が上がるとたちまち津屋川を逆流するため、諸処で堤防決壊・浸水が相次ぎ、多芸輪中にとって暴れ川と呼ばれた牧田川以上に大きな被害を与える河川でした。いったん入水すると低湿地に加え、津屋川への自然排水は干潮時の僅かな時間しか出来ないことから、悪水の滞留が長引きました。

氾濫を繰り返す津屋川では、たえず堤防強化に重点を置いた河川工事が行われてきました。木曾三川の全面的な改修工事となった薩摩藩による宝暦治水では、三之手（墨俣輪中

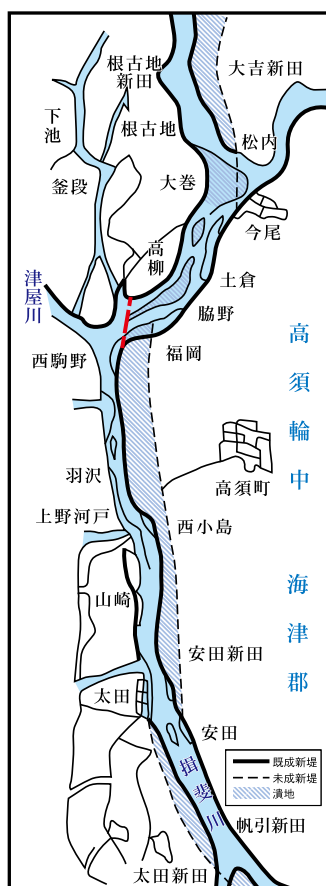
から本阿弥輪中までの工区）に含まれ津屋川通では一二工事が施工されました。多くの犠牲者を出した宝暦治水ですが、当地では太田円成寺に二三名の薩摩藩士が弔われています。

美濃では明和年間に、二回の御手伝普請が行われています。明和二年（一七六五）は特に洪水の多い年で、揖斐川・津屋川が氾濫し多芸郡・石津郡に大きな被害が生じたので、翌三年幕府は長州藩に復旧工事の御手伝を命じました。明和五年には、徳島・豊後・久留米・大洲・秋月の五藩が改修を命じられ、津屋川では秋月藩が津屋川通丈夫付を請け負っています。

度々、堤防工事が行われた津屋川ですが、洪水被害が減ることはなく、抜本的な対策は明治改修まで持ち越されます。

明治改修と昭和の支派川改修

木曾三川下流域の洪水被害を排除するため、三川の完全分流と各河川の流下の改善を目指した木曾川下流改修



明治改修図



南濃町羽沢の津屋川水門

（明治改修）では、揖斐川左岸・高須輪中を福岡から安田にかけて開削して新河道を設け、福岡と高柳間で旧揖斐川を締切りました。この締切りによって、旧揖斐川右岸堤は新揖斐川と津屋川の背割堤となり、津屋川を約三五km流下させ、揖斐川との合流点を山崎に移しました。この河道変更によって、津屋川の流下が促進され、多芸輪中の悪水排除が改善されました。

明治改修に続いて木曾川上流改修（大正改修）が完成すると、濃尾平野の中でも岐阜県西南濃地方の輪中地帯の数多くの小支派川による悪水排除が課題として残されました。昭和三年（一九二八）、緊急着手を要する犀川・三水川・牧田川とその支川の改

修予算が、大正改修の付帯工事として認められました。なお改修を要する境川・鳥羽川・粕川・水門川・杭瀬川とその支川および津屋川については、翌四年から国庫補助金が計上されました。この内、津屋川については、

揖斐川の水位が上がると、逆水がおり、長時間排水が困難になって農作物の被害が多く出ていたので、揖斐川合流点の少し上流・上野河戸地先に逆水を防ぐ水門の設置の計画が立てられ、予算が計上されました。その後、支派川改修は昭和二五年度で打ち切られ、調査は行われたものの着手されず、結局昭和二六年度以降の災害防除施設費をもって建設されることとなりました。津屋川水門は、昭和二八年（一九五三）一〇月に建設省の直轄工事として着工。同三四年三月に完成しました。

明暦二年に新田開発のため築造された津屋川は、数えきれない改修を経て、今では、かけがえのない自然として地域の人々に親しまれています。

参考文献

- 『南濃町史』昭和五七年 南濃町
- 『養老町史』昭和五三年 養老町
- 『岐阜県治水史』昭和五六年 岐阜県
- 『木曾三川流域誌』平成四年 建設省中部地方建設局
- 『木曾三川治水 百年のあゆみ』平成七年 建設省中部地方建設局

濃尾地震と
河川災害

第二編

濃尾地震による

堤防崩壊などの河川被害

岐阜県・愛知県を中心に、甚大な被害をもたらした濃尾地震。根尾川上流で発生した直下型地震は、木曽三川の堤防を各地で崩壊させました。残された史料から被害の実態を検証していきます。

木曽三川流域で大きな被害

明治二十四年（一九一）六時三七分頃、岐阜県根尾村を震源地とする濃尾地震が発生、岐阜県を中心に木曽三川流域に大きな被害をもたらしました。その規模は、直下型地震としては、わが国の有史以来最大とされるM八・〇（M八・四とする説もある）で、家屋全壊九万余・半壊七万余、死者七、八八五人（全国合計）の大災害となりました。当時は、各地点の震度などは観測されていないので、地震がどの辺りでどれだけの揺れであ

ったのかを示す数値は残されていません。指標としては、「図一・建物の損壊状況」によって、およそその地震の規模を推測することができます。図中のピンクで塗りつぶした地域は、全ての建物が全壊したことを示しており、いかに大きな地震であったかがわかります。

また、被害の実態についても、現在のように体系的に整理されていませんから、どこでどの程度の被害が発生していたのかを同一の指標に基づいて表すことは困難です。ここでは市町村史などに残されている史料から、河川堤防の被害に関する記述を抽出して、その実態がどのようなものであったか検証していきます。

岐阜県の河川堤防被害

木曽三川流域でも最も被害が大きかった岐阜県の河川堤防は、約七五二kmにわたって崩壊し、その内、緊急に工事を行う必要がある堤防だけでも一三六kmに及んでいます。堤



長良川堤防の被害

防の被害がどの程度のものであったのかを、県下の市町村史の記述から拾ってみます。

「堤防の破壊いたるところに生じ」『輪之内史』

「道路堤防の崩壊・割裂など激しく」『糸貫町史』

「今回ノ震災ニテ従来干城トスベキ堤防モ処々潰裂、今ニシテ不幸ニモ終日ノ降雨ニ際セハ、家ノ水トナルハ眼前ニテ、」『穂積町史』

「堤防、川床、道路…の陥没隆起がいたるところでおこった。」『木曽川町史』

「堤塘は平水面まで陥落したる箇所あり」『北方町史』

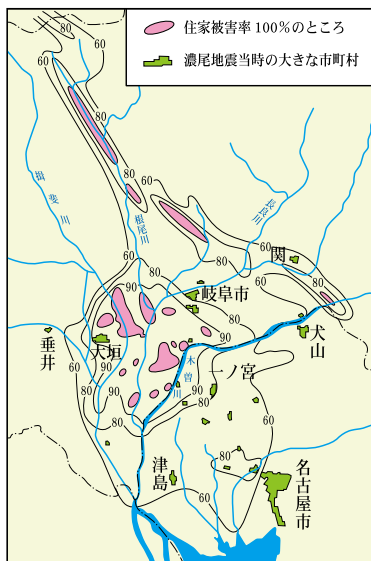
「木曽川堤塘等ハ大ニ壊裂シ。土砂噴出」『岐南町史』

「所々に大きな地割れが出来て青い泥をふき出し、堤防は真中から割れて大きな口をあけていた。」『海津町史』

「境川の堤も、各所で寸断されて凹凸が出来、凹地になった堤は、普通の田畑と同様の低地となり、この低地となった堤の土は、何処へ運び去られた事やら」『柳津町史』

該当する地域の市町村史でも、河川堤防の被害については触れていないものも多く、堤防崩壊の程度などを知るには不十分な内容となっています。

市町村史より、やや具体的に被害について述べられている資料として、震災直後に全国を対象として、河角廣東京大学教授により行われたアン



図一・建物の損壊状況

ケート調査「明治二四年一〇月二八日濃尾地震資料集第一巻」第三巻 東京大学地震研究所」があります。

アンケート項目は多岐に亘る二四項目から成っていますが、その中の「⑬築堤ノ崩壊セシモノアリヤ」の回答を抜き出します。

岐阜県大野郡宝江村

「余ガ地方ハ堤防非常ニ崩壊シ悪シキニ至リテハ近傍田面ヨリ一尺モ低キ場所ニ陥落セシ所アリ堤防ノ烈虧ハ到ル処無キハサシ」

岐阜県厚見郡江崎村及今嶺村

「堤防ハ所々ニ大亀裂ヲ生ジ何レモ左右低キニ向ッテ崩壊シ旧形ヲ保ツモノ少ナシ就中江崎村堤塘延長八〇〇間ノ中四〇〇間許ハ其最モ甚シキモノニシテ崩壊ト云ハンヨリ寧口陥落ト云フノ優レルニ至レリ此ノ如キ堤塘ハ我岐阜縣下中其

数少ナシ 圖ノ如ク旧形ノ一〇分ノ一トナリ堤心ハ陥落シテ溝渠ノ如キ觀ヲナスニ至レリ」

岐阜県中島郡大浦町

「築堤ノ崩壊セシモノ最モ多ク木曾、揖斐、長良ノ三大河ニ沿ヒタル三堤塘トモ全壊ト云フモ背テ不可ナキナリ就中木曾堤、長良堤ニ如キハ崩壊シテ耕地ノ面ト準一ナルモノアリ或ハ水面ト平準ナルモノアリ其他縣下ニ於テ小堤塘ノ崩壊セシコト数フルニ違アラス」

岐阜県中島郡江吉良村

「築堤ノ崩壊甚シク間々平地ト同ジキ場所アリ」

岐阜県大垣町

「築堤ハ所々崩壊セリ而シテ其崩壊ノ方向ハ多ク築堤ノ方向ニ平行セリ」

岐阜県安八郡今宿村

「土地ノ隆起陥没築堤ノ崩壊等過般吾ガ大垣輪中堤防事務所ヨリ寫眞十数葉内務省へ進達シ置キタル就テ閲覧ヲ乞フ」

これは、一部の町村の回答ですが、流域全体の堤防が壊滅的な被害を受けたことが推察されます。岐阜県では、堤防のほか多数の樋門や長良川鉄橋などの橋梁が甚大な被害を受けました。

愛知県の河川堤防被害

岐阜県に次いで被害の大きかった

愛知県の内、木曾川沿川の市町村史を見ていきます。

「木曾川佐屋川ノ堤防ニテ七間乃至一〇間モ崩レ或ハ同一深キマデ陥没シタルガ故ニ僅カ三合目ノ出水デモ防禦スルコト能ハズ」『祖父江町史』

「木曾川堤にひびが入っただけで堤防は切れなかったが、地割れから地下水が吹き出していました。」「尾西町史」

また、前述した東京大学のアンケートでは、

愛知県丹羽郡大山村

「木曾川堤防ノ新ニ人工ヲ施シタル處イハ破壊尤モ甚ダシク崩壊シテ池水ノ田面ヲ浸スケ所アリ」

愛知県中島郡二宮町

「河心ヘ向ヒ崩壊セシ堤アリ、其長さ一問程、黒線は崩壊シタル状、河ハ用水。」

愛知県海西郡弥富村前ヶ須

「築堤ノ崩壊ハ一丈三尺許ノ低地トナルモノアリ。」

愛知県丹羽郡大山村

「木曾川堤防ノ新ニ人工ヲ施シタル處イハ破壊尤モ甚ダシク崩壊シテ池水ノ田面ヲ浸スケ所アリ」

さらに、津島町・神守町・稲沢町・祖父江町・犬山村・小折町・布袋町・宮田村・起村下村が、堤防崩壊について「ナシ」と回答しています。

こうした記述からは、愛知県の木曾川沿川は岐阜県に比べて、被害は



揖斐川堤防の被害

局部的で崩壊も新堤に限られるなど、大規模な被害は発生していないことがうかがえます。明治改修以前では、木曾川左岸堤防が際立つて強固であったことがわかります。

三重県の河川堤防被害

三重県全体の人的被害や倒壊家屋などは、岐阜県や愛知県と比較すると軽微とも言える程度でしたが、木曾三川の輪中地域では甚大な河川被害が生じました。その様子が当時の伊勢新聞の記事に詳細に書かれています。

「本郡七取村堤防決壊して河水田面に浸入せり」

「城南村堤防決壊八四八間、深谷村堤防欠損六八間、野代村堤防欠潰二二〇間内三四・五間落込み、多度



長良川鉄橋の崩落

村堤防欠潰
七二間、七
取村堤防欠
潰一一〇間
楠村堤防欠
潰九二〇間
長島村堤防
決潰一〇〇
間、木曾岬
村堤防欠潰
二九〇間
「伊曾島村
堤防 松蔭

新田一〇ヶ所(各二〇間)、白鷄新田
一ヶ所(三〇間余)、横満蔵新田一ヶ
所(一〇〇間余)。木曾岬村 堤防決
壊及陥落 見入新田鍋田川堤防陥落
六〇間、深さ一間乃至二間、加路戸
新田木曾川堤防決壊陥落一ヶ所二〇
間、同唐崎堤防決壊三〇間一ヶ所、
同木曾川堤防決壊一ヶ所三〇間、源
緑新田堤防決壊一ヶ所四〇間、同決
壊二ヶ所各四〇間、此外野代、深谷
両村にて堤防の破損一八ヶ所。」

東京大学のアンケートでは、
三重県桑名郡七取村大字香取

・観測村内ニテ築堤ノ陥没或ハ崩壊セ
シ箇所一〇数ヶ所ニシテ其最モ甚キ
ハ水面ト均シキマテ陥没セシモノア
リ。

三重県桑名郡伊曾島村福豊

・築堤ノ崩壊セシモノハ木曾川又ハ
伊勢内海ニ沿ヒテ長サ五〇間或ハ

一〇〇間其陥没ノ深サ八尺或ハ九尺
ニ至ル。

以上のように、三重県の木曾三川堤
防は、岐阜県同様に広範囲で大きな
被害を被りました。

堤防被害の実態

ここまで紹介してきた資料は、そ
の数は多くはないものの、いずれも
濃尾地震による堤防の崩壊に関して
集積された貴重な資料です。木曾三
川の堤防被害は、木曾川左岸を除い
た広範囲に亘り、各所で堤防の崩壊
が生じたと理解してよいと考えられ
ます。

堤防の被害については、堤防が陥
没していることを示している記述が
多く、中でも「築堤ノ崩壊甚シク間々
平地ト同ジキ場所アリ」、「崩壊シ旧
形を保ツモノナシ」のように築堤の
形を残さないまでに完全に陥没して
いる形態は注目すべきです。これは
「崩壊と言うより陥落である」と書か
れているように、堤防の破損ではな
く、堤防そのものが地中に陥没して
いることを言い表しています。

築堤の崩壊形状に関しては、「堤防
ハ所々二大亀裂ヲ生ジ何レモ左右低
キニ向ツテ崩壊」、「崩壊ノ方向ハ多
ク築堤ノ方向ニ平行セリ」、「河心ハ
向ヒ崩壊セシ堤アリ」とあり、築堤
の方向に亀裂が入り、河心に向かっ
て崩壊したと述べています。堤防崩

壊の現状写真も示すように、堤防の
崩壊は、法線方向に無数の亀裂が入
り、この亀裂をもとにして、河表・河
裏の方向にずり落ちて行つたと解釈
できます。

陥没後の高さについては、「近傍田
面ヨリ一尺モ低キ場所ニ陥落セシ所
アリ」、「凹地になった堤は、普通の
田畑と同様の低地となり」、「水面ト
均シキマテ陥没セシモノアリ」、「堤
塘は平水面まで陥落」とあるように
築堤箇所の地盤高まで陥没している
との記述が多く見られます。

木曾川下流改修の被害

震災のあった明治二四年当時は、
木曾川下流改修が着工されていまし
たが、木曾川導流堤が明治二三年
一〇月に完成していた他は、築堤工
事などはまだ着手されていませんで
した。

完成していた木曾川導流堤の被害
について、『木曾川改修工事概要』に
は、「・・・未曾有ノ震災ニ遭遇シ土
堤部ハ多少亀裂又ハ陥落ニ止マリシ
モ石堤部ハ或ハ沈降シ或ハ左右二展
開シ著シキ破損ヲ被リ之ガ復旧ヲナ
スニ當リ再ヒ石材ノ供給ニ不便ヲ感
シタリ加フルニ恰モ震災復旧工事ノ
盛時ニ會シ材料ハ漸時缺乏ヲ加エタ
リ・・・」と記されています。伊勢新
聞にも「木曾川改築の為め、海中に斗
出造築せる新堤防は大破に及びたり」



伊勢湾に突き出した木曾川導流堤

とあります。

しかし、濃尾地震が木曾川下流改
修に与えた影響は、木曾川導流堤の
修築に留まらず、震災復興に多額の
費用が費やされた結果、工事全体の
進捗に遅れをもたらしました。

参考文献

- 『岐阜県治水史』昭和五六年 岐阜県
- 『木曾川改修工事概要』明治四四年
内務省名古屋土木出張所
- 『明治二四年一〇月二八日 濃尾地震資料集
第一巻(第三巻)』東京大学地震研究所
市町村史については文中に表記

研究資料

教育現場からの質問

前海津市歴史民俗資料館特別指導員 瀬古 尹宏

まさひろ 尹宏



瀬古 尹宏 氏

1935年生
最終学歴 岐阜大学 学芸学部社会学科
職歴 海津町立高須小学校校長を最後に退職
著書 『ねうちづくりシリーズ』『海津町史』『図説羽島・南濃の歴史』『定本長良川』等

はじめに

海津市歴史民俗資料館では、年間多くの学校からの見学者を受け入れています。その児童生徒たちや教育現場から「低地の生活」についてのたくさん質問や疑問が寄せられています。ページ数の都合上、その中から三点について述べたいと思います。

Q 段々になっていないこんな平地で、どのようにして田に水を入れているのですか。

日本の国(岐阜県)は、山が多い地形で普通よく目にするのは、傾斜地で段状に作られている田です。

水は山の麓から谷水として出てきます。その川の両側に田が広がっています。田植えの季節になると、まず高い所にある田に水を入れて耕作が始まります。その水や水路によって運ばれた水が、順に低いところにある田に取り入れられます。そして



水田に引水するパイプライン

田植えが始まります。稲作には、水は欠くことができないものです。昔から田に水を引き入れるために、いろいろ工夫がされてきました。

さてこの辺りの平地では、昔は全て自然に依存していたと言っても過言ではありません。米作自体は、本来日本の気候に合ったものです。田

植えの時期には梅雨があり、刈入れの時期には秋晴れが続くといった具合です。

しかし思ったようにならない年もあります。そんな時には、神頼みです。この辺りでは、多度大社などで祈祷を受け、御幣をいただいて地区内で祀りました。

やがて江戸時代の中頃になりますと、高須輪中の高位部(上郷)では「掘抜き井戸」が掘られるようになります。田や畑に井戸を掘り、その自噴水で水を取り入れようとしたわけです。文久二年(一八六二)には、高須輪中内に三八六本の掘抜き井戸とその分水井戸が一〇一本あったとの記録があります。

一方高須輪中の低位部(下郷)では、排水が困難なほど湛水にあえいでいたため、水は満たされていたのでありますが、田植え時に水が少ない場合は、満潮の時に掛斐川や長良川を上ってきた水を樋門から入れて、その水を田に引き入れていました。



海津市平田町勝賀の勝賀揚水機場

戦後、高須輪中では、第一次基盤整備事業が昭和三二年(一九四七)から同四六年(一九七一)に、第二次基盤整備事業が昭和五五年(一九八〇)から平成一年(一九九九)に実施されました。これにより稲作の条件が大変近代化されました。水源も、第一次基盤整備事業で勝賀揚水機

川より取水）が建設され、一、六五七haと高須輪中全体の半分ほどの水を賄うことができるようになりました。

しかしまだ、逆潮利用の田が五・一三haほどありました。第二次基盤整備事業では、新大江揚水機（長良川より取水）が建設され、逆潮利用の田は全く無くなりました。

現在では、次の三カ所を水源としています。

勝賀揚水機	八〇〇ha
中江用水	八〇七ha
新大江揚水機	一、五八八ha
計	三、一九五ha

この水源が加圧揚水機場一九カ所



海津市海津町江東の中江川

に分割され、末端では全てパイプラインにより水を入れることが可能になりました。つまり、太い水道管によって水が引かれ、蛇口をひねるとその田に水が入るようになったわけです。田が段々になつていなくても、現在では田滑に水を引き入れることができるようになりました。もちろんこの取水方法にはお金がかかります。また、年中パイプから水が出るわけではなく、田に水が必要な時期のみに分水されるのです。

また第二次事業の用水の工夫は、次のようなこととあわせて実施されました。

- ①用排水の分離と乾田化
- ②道路計画の見直しと拡幅
- ③圃場の大型化
- ④農村生活環境の整備

①の「用排水の分離」というのは、従来田に水を入れるための水路と、田から水を出す水路が同じであり、そのためその地区の住民が一斉に田植えなど同じ作業を実施しないと混乱がおきる状態でありました。整備事業後は、取水はパイプから、排水は水路からということになり、その地区が同時期に田植えを行わなくても済むようになりました。これは大変便利にはなりましたが、農村の共同体意識が薄くなつていくような心配も出てきています。

Q 海津町の人々が、長良川河口堰の建設に賛成したのはなぜですか。

昭和三四年（一九五九）九月の伊勢湾台風は大洪水をもたらし、各地で河川が氾濫し、大災害となりました。

その後も昭和三五年八月の台風や翌三六年六月の梅雨前線豪雨は、長良川に沿う市町村に被害をもたらしました。そんなことから、昭和三六年には河口堰建設計画が立てられました。それに対して、海津・平田町議会、海津・平田町自治会、高須輪中土地改良区、高須輪中水防組合、海津町漁業組合のいわゆる五団体は、河口堰反対期成同盟を結成して反対の決議をしました。

昭和四三年には、県知事からも住民が納得することが第一の条件であるとして、他の四項目の条件がかわらせて要望として出されました。

当時の建設省（現国土交通省）は、宅地開発などによる河川の水量の増加や、地盤沈下の影響もあり、長良川に安全に流すことができる水量（計画高水量）を八、〇〇〇m³/秒にしたという考えでした。

明治の下流改修工事では四、一七〇m³/秒

大正の上流改修工事では四、五〇〇m³/秒



左岸下流から見た長良川河口堰

となっていますが、これを岐阜市忠節にて八、〇〇〇m³/秒にしないと安全が保障できないということです。それには、堤防を高くするか川幅を広げるか河道を浚渫するかということになります。堤防を高くしても川幅を広げても、大変たくさん橋や樋を作り直さなければなりません。そこで河道を浚渫することに落ち着きました。しかし河道を浚渫すると、伊勢湾から塩分が上ってきて、田畑に害を及ぼすので河口堰を設けなければならぬという論法です。

この地域では、より水位を低下させ、その上で堤防の補強、内水の排除といった工事を優先し安全を確保して欲しいという要望が強く出されました。そして県の承諾が無い限り堰本体の建設に着工しないというこ

とで、事業の実施を県知事に一任することになりました。

その後、水源地域対策特別措置法といったいくつかの法律がつくられたり、それを準用した水源地对策基金制度により高須輪中排水機場が建設されたり、ブランクットが整備され、鋼矢板が打たれたりしました。もちろん堤防の高さも幅もいっそう高く広くなりました。

昭和五十一年（一九七六）九月には、安八町内の長良川堤防が決潰するというようなこともあって、同五三年に海津・平田町議会が堰建設の同意をしました。補償対策や事業の進行のチェック等は県知事に一任ということになりました。

昭和六十三年いよいよ河口堰工事に着工し、そして平成七年（一九九五）完成し、従来河口堰の代わりをしていた長良川のマウンドが同九年に取り除かれました。

このように海津市の住民は、初めは長良川河口堰の建設に反対をしていたのですが、住民側からの条件を受け入れてもらうことで、賛成の立場に立ったのです。

Q どうしてそんな水害の恐れのある土地に住んでいるのですか。

長崎県の雲仙普賢岳では、平成三

年（一九九二）六月に東側斜面から火砕流が発生し、島原市水無川流域の民家などを一気に呑みこんだ災害がありました。火砕流は山頂から勢いよく駆け下り、麓の町々の家屋や人々や農作物を犠牲にしました。まさに地獄絵のようであったということです。

ところがこの被災地域では、約二〇〇年前の寛政四年（一七九二）にも同じような火砕流が発生していたことが分かりました。同じ土地で牛を飼い、果樹を育て、農作物を栽培して、子孫が生業を営んできたわけです。

また東京都の三宅島では、平成一二年六月より噴火が始まり、九月四日に全島の住民に避難命令が出ま



高須輪中南部の田園風景

した。そしてその後、島への立ち入りが禁止されました。一〇年余り経った現在、元の島民の九割は、東京都営住宅に分散入居されていますが、ふるさとへの思いは強く、復興に夢を託している人々がたくさんおられるとのこと。

近くの揖斐川上流の旧揖斐郡徳山村では、ダム建設により一時立ち退かれたにもかかわらず、一部の旧村民の人々が夏の間旧村へ入って生活されているというニュースを聞きます。

いま三つの例を挙げましたが、人は住み慣れた地域を離れたいよう

です。さて、私が市内の「老人会」や「高齢者学級」でお話をお聞きしたこと

をまとめると、次のようなことです。一つは、農業に従事する方が多い海津市では、それぞれが農地を所有しています。その農地を利用して生活をしており、農地が生活の基にな

っているということです。また、先祖がこの地域に住まいを定めてから多くの知人や親戚、友人ができ、人とのつながりが強くなります。

このような土地や人間のつながりを捨てて他の地域に移るということは、大変勇気がいることのように

私たち人類は、この地に生まれて

から、数多くの困難を血と汗で克服してきた歴史があります。この五十年ほど前までの日本人の歩みは、自分たちの食糧を確保するための歩みであったとも言えます。困難から逃げるのではなく、水害を無くすような、水害に負けない努力も必要です。

近年、日本人の生活も大きく変化しています。農業も大規模化され、専門化され集約化されてきました。土地を手放す人も増えてくるかと思えます。仕事先も広がり、この地域と離れた場所に仕事を持ち、新しい親戚・友人を持つ人々も出てきました。

したがって、このように水害の恐れのあるところから今後転居される住民が多くなることも予想されます。

〇おわりに

以上素朴な三つの質問に対し、率直な考えを述べました。このたびの学習指導要領の改訂により、高須輪中に対する教育現場からの関心が高まっているようです。拙稿が現在の高須輪中を知る一助となれば幸いです。

庭田の阿伽井水

海津市南濃町

美濃国の国分寺(大垣市青墓)を建立していた行基上人は、毎夜南の空にかかる三つの虹の輪が気になって、庭田の地にやってきました。道端で休んでいると、夢に翁が現れて

「この地は仏縁の深いところ。この地に寺を建てるがよい」と、言い置されました。夢から覚めた行基上人が、村人に尋ねると、「この奥の榎谷というところに、榎(かや)の太木があります。夜になると大蛇が現れ、木に巻きついて、朝になるとどこかへ消えていきます。」

村人に案内されて、谷に分け入ってみると、確かに榎の太木が堂々とした姿で立っています。しかも、根元より2メートルくらい上で五木の幹に分かれていきます。

これは霊木に違いない、と感じた上人は、五木の幹から五体の仏像を刻むことにしました。

暑い夏の日の最中に、榎の木の切れ出しに集められた大勢の人夫たちが、口々に喉の渴きを訴えたので、行基上人は、持っていた杖で地面を突きました。すると、そこから清水が湧き出し、人々は上人の神通力に合掌しました。

この清水は「阿伽井水」と呼ばれ、立派な七堂伽藍が建立された後も多くの人々の渴きをいやしました。お寺は三つの虹の輪から、三輪山一条院円満寺と名づけられましたが、兵火にあつて焼失し、現在の場所に移されました。



木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

《休館日》

毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

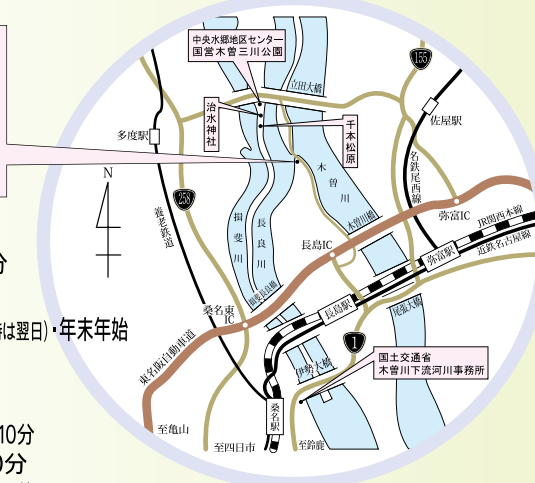
《入館料》無料

《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分



木曽川文庫ホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/bunko/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

編集後記

前号より引き続き『歴史記録 濃尾地震と河川災害』を特集いたします。

明治改修シリーズ第一編～第七編はVol.61～67、第八編からはVol.74号～76号を参照下さい。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川文庫ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上

「損斐川」

津屋川合流点下流の損斐川。左岸(写真手前)は、養老山地が迫り平野部は狭隘地で、これより下流に太田輪中・七郷輪中が開発されました。対岸は高須輪中で、明治改修時に引堤して河道を拡張しています。

中

「羽根谷巨石積み砂防堰堤」(羽根谷だんだん公園)

明治の初めにデ・レイケの指導によって造られた砂防堰堤。近代砂防の先駆けとされ、羽根谷には同様の堰堤がたくさん造られました。「羽根谷だんだん公園」には、砂防の学習施設「さぼう遊学館」があります。

下

「津屋川」

津屋川下流部。養老山地から流れ出る谷水を集めて損斐川に注ぐ津屋川は、江戸時代に平野部を開発するために開削された人工河川です。かつては、ひんばんに洪水被害をもたらす河川でしたが、今では貴重な自然として地域に親しまれています。

『KISSO』Vol.78 平成23年4月発行

編集・発行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5715

ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>